ハイスクールD×Dサーガブレイヴ～馬神弾の異世界物語～

ブレイヴ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異界魔族と人類がバトルスピリッツによる代理戦争で争っていた２７世紀の地球……魔族が地球の中心近くに打ち込んだコアの影響により、星の自浄作用で全てを滅ぼす『地球リセット』が起きようとしていた…そして過去から人類の勝利の為に異界王に勝ってグラン・ロロと地球を救った赤の光主…〝馬神弾〟が呼ばれて未来の地球を救うべくそして人類と魔族を救う為…仲間と共に戦い続けるのだった…やがて魔族と人類も互いを認めて地球リセットを阻止すべく十二宮Ｘレアを使って引き金をかけて馬神弾と月光のバローネが最後の人類と魔族のバトルをするのだった。勝利した馬神弾は引き金となって未来の世界で消滅することで世界リセットを阻止して人類と魔族の戦争に終結をもたらしたのだった…そして馬神弾が消えて十年後の未来の世界では、人類と魔族との新たな共存を築き上げていたが…魔族を憎む一部の人々による過激派組織『人類至上戦線カーディナル・サイン』によるテロリストが起きていた…そして仲間と世界の危機に消えたはずの馬神弾が再び現れてカーディナル・サインと戦うのだった。カーディナル・サインとの戦いが終えた馬神弾は再び仲間達との別れをして世界を守る側に戻るも十二宮Ｘレア達が光輝きダンに何かを伝える。そして馬神弾はその異世界に向かうのだった。

目次

～番外編～
～番外編1「今後の展開前編」～ ―― 1
～番外編2「今後の展開中編」～ ―― 5
～番外編3「今後の展開後編」～ ―― 8
―序章―
～プロローグ「異世界への旅立ち」 ―― 12
～第一話「異世界に降臨する救世主」 ―― 15
～第二話「激突するドラゴン達！二天龍VS超神光龍」～ ―― 20
～第三話「激突王のキセキ」～ ―― 24
～第四話「次の場所、新たな出会い」 ―― 33
～第五話「初めての戦闘」～ ―― 37
～第六話「黒歌の真実」～ ―― 41

～番外編～

～番外編１「今後の展開前編」～

作者のブレイヴです皆さまお久しぶりです!!!元気でしたか？サーガブレイヴが始まったので再び書くことになりましたので改めてよろしくお願いします～

???「ホント久しぶりだな…」

「ホントです…」

???「つーか失踪していたんじゃねぇ？」

それはないです（キッパリ

???「でも、読者のみんなにはそう思われているわよ？」

「そうですね…やはりここは謝罪をした方がいいのでは？」

だが断る！私は謝らない！（キリっ

???「うふふ…では、向こうでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩといきましょうか？」（肩を掴んで満面な笑み

へ？あ、いや…ご、ごめんなさい!!

???「うふふ…時間切れです♪」（ズルズルと引きずり

いや！誰か！誰か助けて!?

アアアアアッ!!!!

一同「……」（合掌

???「…さて、作者が不在の為私が司会進行していくわ！」（メガネをかけて

???「うおおっ！部長のメガネ姿最高です!!」（興奮して鼻の下を伸ばしており

「…変態です」（真顔でそう告げて
「グハッ!?」（撃沈
「あはは…（苦笑）」
「ブレないな…」
???「こほん！お喋りはそこまで！じゃあ…まず、みんなには自己紹介してもらいましょうか？」
???「うすっ！了解です！部長!!」
「じゃあ…イッセー？貴方から頼むわね？」
???「了解です！んじゃ…俺は、駒王学園の二年でオカルト研究部の兵藤一誠って言うんだ！学園やみんなからイッセーって呼ばれているぜ！よろしくな！ちなみに部長の最強のポーン（兵士）で夢は魔王になってハーレムを作ることだぜ！ハーレム王に俺はなる！あ、後…おっぱいの大きい美少女が大好きです！」
???「変態は死すべし！」（イッセーのお腹目掛けて渾身のストレートパンチを打ち込む
イッセー「ゴハッ!?い、今のパンチは世界を狙えるぜ…ガク」（吹き飛んで壁にめり込み気絶
???「イッセー!?」
「今のは…殺意の乗ったパンチだったね？」（冷や汗
「大丈夫です…加減はしました……　1割程…」
???「いや、それもう本気ってレベルだからな？」（苦笑しながらツッコミを入れて
???「はぁ…仕方がないわね…イッセーはあの子に任せて続けましょうか…」
???「そうだな…　イッセーにはいい薬だろうし…」
???「という事で、次は私ね？皆さんご機嫌よう…私の名前はリアス・グレモリーと言うわ！この子達の王（キング）で駒王学園の三年でオカルト研究部の部長をやっているわ！好きな事は読書とチェスかしら？よろしくね？」
「次は、僕だね？僕は木場裕斗同じく駒王学園のに通っていてイッセー君と同じ二年生だよ？もちろんオカルト研究部所属でリアス部

長のナイト（騎士）です。皆さんどうぞよろしくお願いします。」
「うふふ…次は私ね？私は姫島朱乃と言いますわ♪皆さんとご一緒で駒王学園に通っていてリアスと同じく三年でオカルト研究部の副部長を務めておりますわ♪ちなみに女王（クイーン）ですわ♪」
リアス「あ、朱乃？いつ戻っていたのかしら？」
朱乃「うふふ♪ついさっきですわ♪」（ニコニコして
リアス「そ、そう…ところで作者は？」
朱乃「あそこですわ♪」（指を指して

希望～の花～♪
……（止まるんじゃねぇぞ

???「それ以上は駄目だろう!?」
???「シャドーボクシングをして」
やだこの子怖い…
リアス「それじゃあ…次は小猫ね？」
???「分かりました……　皆さんどうも…私は塔城小猫と言います。駒王学園の一年…オカルト研究部の一員です。そして部長のルーク（戦車）です後…」（ちら
???「んっ？どうしたんだ？小猫？」
小猫「っ／／／!?な、なんでもない…です／／／」
???「そうか？」
小猫「……　／／／」（コクッと頷き
いや～ウブだね～
小猫「黙れです」（アッパー
ゴフッ!?（スローで倒れて
K．O！
小猫「ブイ」（ピースをして
???「あはは…」（苦笑
リアス「それじゃあ、そろそろ本命に自己紹介してもらいましょうか♪」

???「本命？」
貴方のことですよ～ささっどうぞ！
???「あ、ああ…みんな…はじめましてだな？この作品のもう一人の主人公でバトルスピリッツ少年激破ダンとバトルスピリッツブレイヴ…そしてバトルスピリッツサーガブレイヴの主人公をやっている…馬神弾だ…… よろしくな？」
はい！ありがとうございます～取りあえず今日は挨拶だけにして次回に話を回しましょう～
ダン「えっ？もう終わりか？」
まあ…色々と…（目を逸らして
ダン「それじゃあ、今日はここまでだな？」
はい～では、次回に会いましょう～じゃあね～

イッセー「いや、終わりかよ!?」
チャンチャン♪
イッセー「チャンチャンじゃねぇ!!」
チャンチャン♪

～番外編２「今後の展開中編」～

はい！という事で前の続きをやっていきたいと思います！
イッセー「その前に質問～」（挙手して
はい！イッセー君！
イッセー「本編はどうするんだ？もう書くだろう？」
……（目を逸らし
イッセー「おい!?」
朱乃「あらあら～これは…ギルティ～ですわね？」（バチバチ!!
ヒィィィィッ!!!
リアス「落ち着きなさい朱乃…」（メガネをかけ直して
ダン「リアスはノリノリだな…」
小猫「そうですね…」
木場「あはは…」（苦笑
コホン！え、えっと…まず、色々と整理することになりますが…ダンさんはこの作品では、サーガブレイヴの話が終了してすぐに異世界に行くと言う設定になっています。
ダン「そういえば…そう言う設定だったな…」
イッセー「大変だな～」
まあ…ダンさん所謂神さま枠ですからね～
ダン「そうなのか？」
そうですよ～と言うより神みたいな雰囲気を出していますね～～
ダン「そうか…」
ちなみにいくつか制限をしたまま異世界に行くので～
ダン「制限？」
はい！要はサーガブレイヴの力を使えないと言うことです！
イッセー「それって弱体化ってことか？」
いや、弱体化と言うより力を抑えていると言うことです。
リアス「そうなのね…」
あっ…でも、ある話で力を使うと思います…未定ですが…

ダン「そっか…ところでその世界での俺の力ってどうなっているんだ？」
それを踏まえて解説させていただきま～す♪
ダン「あ、ああ…わかった」
ではまず…ダンさんの基本的な戦闘スタイルですが…今まで通りにバトルフォームを纏ってカードを使用して戦うことになります～
イッセー「んっ？じゃあ…その姿ではぐれ悪魔とか戦うのか？」
そうです～ただもう一つとして憑依と言う力でダンさんのブレイヴ時代のキースピリット達の姿を鎧として纏う事が出来ます所謂禁手（バランス・ブレイカー）ですね…
「だけど、本当の禁手じゃないって事だよね？」
その通り！本当の禁手は…今のところ内緒かな？
小猫「むっ…気になります…」
朱乃「そうですわね～」
リアス「確かに気になるわね…」
ちなみにサーガブレイヴのスピリットもある程度なら出るかもしれませんね～
イッセー「うわぁ～!!すげぇ！気になる！」
とりあえず本編は楽しみにしてください♪
ダン「読者の方々は温かい目で見守っていってくれ…」
ちなみにダンさんは、駒王学園に二年生として転入してきます
ダン「そっか…」
そして重要なことを言い忘れていましたが…
一同「？」
ダンさん…異世界早々厄介事に巻き込まれます♪
ダン「……は？」
しばらく厄介事に巻き込まれながら原作スタートと言う流れになります♪
ダン「は？えっ？どう言う事だ？」
詳しくは本編を見て下さい～と言う事で今日はここまで♪次で番外編ラストになります♪そしてその次に本編ですでは、さらば～

イッセー「勝手に終わらせるなぁぁぁっ!!!」
リアス「これは、お仕置きね…朱乃?」
朱乃「うふふ♪了解ですわ♪」
そう言ってそのまま朱乃は満面の笑みのまま作者に近づく
あれ?朱乃…さん?えっ?そんなニコニコした顔でどうs…あ、
まっ、それだけは……

朱乃「ギルティ~♪」

ギャァァァァァッ!!!?

イッセー「…」
木場「…」
リアス「…」
小猫「…」
ダン「…終わるか」
ダンの言葉に無言で頷く四人だった

～番外編３「今後の展開後編」～

リアス「番外編もこの回でおしまいなんだけど…」
ダン「どうしたリアス？」
リアス「次のコーナーが…」
小猫「ダン先輩とイッセー先輩のヒロイン（ハーレム）を決めると言うものです」
イッセー「マジ!?俺モテ期なの!?」
ダン「ブレないな…」
朱乃「あらあら♪」
木場「あはは…イッセー君らしいね」（苦笑
リアス「コホン！まず、イッセーのハーレム状況なんだけど…」
イッセーのヒロイン…リアス、アーシア、ゼノヴィア、夕麻、藍華
イッセー「うおおおおっ!!マジか!?完全に俺モテ期じゃん!?まあ…一人腐れ縁がいるけど…」
ダン「良かったんじゃないか？イッセー？」
イッセー「おう！んでダンの方はっ…っ!?」
ダンのヒロイン…まぁ、小猫、朱乃、黒歌、レイヴェル、ミラ、雪蘭、イザベラ、イリナ、セラフォルー、ソーナ、ロスヴァイセ、ルフェイ、ティアマト、九重
イッセー「だ、ダンに負けた…」（ｏｒｚ
ダン「い、イッセー？」（冷や汗
小猫「ダン先輩とイッセー先輩とでは、天と地との差があります…原作では、イッセー先輩はモテモテですが…此処では、ダン先輩優先なんです」
イッセー「グホッ!?」（小猫の一言で吐血して
ダン「い、イッセー!?」
朱乃「あらあら～」
木場「あはは…小猫ちゃんは容赦ないね…」（苦笑
リアス「それだけダンの魅力が桁違いって事ね…」
ダン「魅力？俺がか？」

小猫「もちろんです！」（ずいっと顔を近づけて
ダン「こ、小猫？顔が近いぞ？」
小猫「ですが…魅力的過ぎて色々な女性が増えてきてます…私だけを見てくれればいいのに…ダン先輩は酷い人です…こうなれば私だけしか考えられない様に監禁を…」（ぶつぶつと呟きながら目がハイライトになり黒いオーラを漂わせて）
イッセー「ひっ!?小猫ちゃん怖っ!?」
木場「こ、これがヤンデレと言うのかな？」
朱乃「あらあら～」
リアス「小猫のヤンデレはヤバイ感あるわね…後二人いるけど…」（そう言ってちらっと朱乃を見て
朱乃「？どうかしたのリアス？」
リアス「い、いえ！何でもないわ!?」
朱乃「？そう？」（キョトンとして
ダン「なあ…小猫？」
小猫「……」（ぶつぶつと独り言を繰り返して聴こえておらず
ダン「……」（優しく頭を撫でて
小猫「ふにゃっ／／／／!?」（トリップしていた小猫はダンに頭を撫でられて顔を真っ赤にしながら正気を取り戻して
ダン「何か知らないが…困ったことがあったなら遠慮なく言ってくれよ？俺は小猫のことが大切（仲間として）だからさ？」
小猫「っ／／／／!?」（ボン！っと小猫から爆発音が鳴り
ダン「小猫…？」
小猫「ふにゃ～／／／／」（ぐるぐると目を回して気絶して
ダン「小猫!?」（抱き支えて
木場「ヤンデレ化した小猫ちゃんを鎮めるなんて…」
イッセー「マジすげぇ…」
リアス「……」（汗タラタラ
朱乃「……」（無言
リアス「……」（ちらっ
朱乃「……」（ハイライトオフ

リアス「(朱乃のハイライトオフゥゥゥッ!?)」
ダン「んっ?朱乃?大丈夫か?」
小猫を休ませてダンは朱乃に近いていく

朱乃「ねぇ…ダン君…?」(ハイライト
リアス/イッセー/木場「(ヒィィィィッ!?)」

ダン「んっ?なんだ?」(キョトンとして

朱乃「私(わたくし)のこと…どう思いますか?」
ダン「んっ?そうだな…」(考えて
朱乃「……」
ダン「とても綺麗な女性だと思うぞ?誰にでも優しい…頼りになる先輩だな…」(そう言って微笑む
朱乃「っ///!?あぅ…///」
リアス「(お、堕ちたぁぁぁっ!?それに何!?もじもじとする朱乃は!完全に小動物じゃない!?)」
イッセー「(ヤベェ…俺…如何あってもダンには勝てない!…むしろ次元が違うし…!)」
木場「(ダン君…君は凄すぎるよ…)」
ダン「…?(みんなどうしたんだ?)」
リアス「そ、それじゃあ!そろそろ閉めるわよ!?」
ダン「あ、ああ…今日はやけに脱落する人が多いな…」
イッセー「(いやっ!二人を堕としたのはダンだからな!?後…羨ましいぞ!コンチクショーー!!!)」
ダン「それじゃあ、次回は本編で会おうな?また会おう!みんな!!」
ーーーENDーーー

???「ふふふ…ダン…たくさんの女が居るのは構わないわ…ただし、貴方の側は誰にも譲らないワ…貴方は私ダケのモノ……ふふふ…フフフ…」

ー序章ー

～プロローグ　「異世界への旅立ち」

【人類至上戦線カーディナル・サイン】との最後の戦いに勝利したカードバトラー〝馬神弾〟は、囚われていた残りの十二宮Xレアを取り返すとダンの想い人…〝紫乃宮まゐ〟に別れを告げていた…

ダン「まゐ…もうお別れだ…」

ダンの身体は光輝きこの世界から消えようとしていた

まゐ「いやっ…！いやよ！また貴方に会えたのに…またお別れだなんて…絶対にイヤっ！行かないで…私を一人にしないでよぉっ！ダン！」

そう言ってダンを強く抱きしめて今まで溜まっていた気持ちをダンにぶつけて涙を流す

ダン「まゐ…別にこれで本当のお別れってなわけじゃないんだ…いつかきっと…会えるさ」

そう言って優しく微笑みながらまゐが流す涙を指で優しく払い

まゐ「ひっく…ひっく…えぐっ…」

その言葉を聴いてまゐはダンを見つめて

ダン「確かに俺は、もうこの世界にいないかもしれない…そうだな…マギサみたいにみんなを遠くからずっと見守っているからな？もし…また世界の危機が来た時…その時は再び駆けつけるさ」

そう言って抱きしめながらまゐの頬を撫でる

まゐ「ひっく…ほんとぉ…？」

ダン「ああ…！」

まゐ「わかった…私…待ってるから…！貴方のことをずっとずっと！待ってるから！」

ダン「ああ！だから…さよならは言わない…」

まゐ「うん！わかってる！」

ダンの言葉にまゐは力強く頷き

ダン「まゐ…んっ…」

まゐ「っ／／／／!?んっ…／／／／」
ダンはそのままゐの唇に優しく自分の唇を重ねていくとまゐは目を見開いて驚くもしっかりとダンの口付けを受け入れていく
まゐ「んっ…／／／／ふぁっ／／／／」
しばらくしてダンが唇を離すとまゐは顔を真っ赤にして蕩けた顔でダンを見つめていく
まゐ「もう…／／／／ダンのばかぁ／／／／私の方がお姉さんなのに…／／／／」
真っ赤な顔でダンにジト目をぶつけながら頬を膨らませる
ダン「どう見ても今のまゐは可愛いぞ？」
まゐ「っ／／／／!?ばか…／／／／」
甘い空間は二人を包み込むが時間は長くは続かず…
ダン「じゃあ…まゐ…元気でな？」
まゐ「うん…ダンもね…？」
ダン「ああ…」
光は輝きダンの身体は消え始めると
まゐ「いってらっしゃい…ダン！」
ダン「まゐ…ああ！行ってくる！」
まゐのエールにダンは応えてそのまま消えて居なくなる
まゐ「…ダン…大好きよ」
そう言ってダンの居た場所にそう呟き微笑む

ーーーーーー
まゐと別れたダンは炎の様に真っ赤な空間に戻って来ていた…
ダン「まゐ…」
別れた後のことを思い出しながら自分の想い人の名前を口にして
ダン「十二宮Xレアは取り戻す事が出来て良かった…」
話を変える為回収した十二宮Xレアのカードを見ながらこれからのことを考え始めるダン

ダン「俺のすべきことは終わった…後は、みんなをまた見守ることに…っ!?」
ダンがこれからのことを考えながら呟くと何か強い力を感じ始めたのだった。
ダン「今のは…」
ピカッ!?

すると集めた十二宮Xレアが光輝き始める
ダン「十二宮Xレアが!?」
光輝く十二宮Xレアに驚くダン…そのダンに対して十二宮Xレアは何かを伝える様に点滅し始める
ダン「…どうやら俺のすべきことがあるようだな…」
十二宮Xレアの輝きに不敵に微笑むダン
ダン「行くか」
そう言ってダンの身体が再び光輝きその場から消えて居なくなり炎の空間には誰の姿もないままだった。

～第一話「異世界に降臨する救世主」

十二宮Xレア達の導きによりダンは光輝き炎の空間から場所とは別の場所に現れる

ダン「…此処は？どうやら異世界みたいだな…」

ダンが閉じていた瞼を開くと辺りを見渡して自分が異世界に来たことを理解する

ダン「この世界での俺のすべきことは何か…んっ？なんだ？変わった気配が複数感じる…強い気配と弱い気配が同時に感じる…何かあるな……」

ダンは考えながら荒野を歩き始めると気配を感じ取り目を細めると気配がある場所へと向かって行くのだった

ーーーーーーーーーーーー

ナレーション）ダンが異世界に来るまでの出来事を説明しよう…時間は遡り、この世界では…悪魔、天使、堕天使による三つ巴の戦いが行われていた互いに傷つき合い戦争は激化していくと思っていたが横槍するかの様に二体の龍が割って入ってくると二体の龍は争い始め…三つの種族を巻き込んで戦いは更に激化していく

「グォォォォォッ!!!」

「ガァァァァァァッ!!!」

二体の龍は互いを攻撃して被害を増加していく

「くっ!?よりにもよって…」

「これでは私達が二体の龍の被害で全滅してしまいます！」

???????

「あ～…兎に角だな…俺達の戦争は、一時休戦でよぉ…あの二匹を倒してからでいいよな？サーゼクス、ミカエル？」

サーゼクス「そうだね…ただ…」
ミカエル「私達の軍勢は先程の戦いで大分消耗してしまいました…貴方の方はどうですか？アザゼル」
アザゼル「ハハハ！俺の方もヤバイぞ？」
ミカエル「アザゼル…笑い事じゃないですよ？」
アザゼル「だからこそだ」
サーゼクス「そうだね…互いを庇いながら戦えばいい話だよ？ミカエル？」
ミカエル「サーゼクス!?しかし…互いに歪み合っていた仲なのに連携を取るのは不可能では…」
アザゼル「オイオイ、大天使であろう者が臆したのかぁ～？」
ミカエル「そんなことありません！」
サーゼクス「なら問題ないね…さてと…私が率いる悪魔軍勢とアザゼル率いる堕天使軍勢で出来るだけあの双龍にダメージを与える…ミカエル率いる天使軍勢はサポートを頼む！」
アザゼル「やれやれ…サーゼクスの案でいくか！聴いたか！野郎ども！クソつまらんプライドは捨てて悪魔と天使に協力してあの二頭のドラゴン共を討伐するぞ！」
ミカエル「貴方達もです！我々の役割はサポートですのでしっかりと彼等を守りますよ！」
オオオオオオオッ!!!!
アザゼルとミカエルの呼びかけに大勢の者達が応えるように叫ぶ
サーゼクス「我々もいくぞ！」
オオオオオオオッ！
サーゼクスが率いる悪魔達も応えるように叫ぶ
サーゼクス「攻撃開始！」
サーゼクスの呼びかけで悪魔、堕天使、天使は二頭の龍に攻撃を開始し始めたのだった。

ーーーーーーーーーーーーーー
ナレーション）そして時間は戻り…
ダン「これは…」
ダンの目の前には沢山の者達が大怪我を負って虫の息のまま倒れていた
ダン「大丈夫か!?」
ダンは近くにいる者を抱き起こして安否を確認する
悪魔）ぐっ…に、人間？なぜ…此処に人間がぁ…ぐっ！
ダン「無理に喋るな！今治療するから待ってろ！」
悪魔）何を言って…
ダン「（すまない…十二宮Xレア…俺に力を貸してくれ！）」
ポワァァ…
ダンの想いが通じたのかダンの腰にあるデッキケースが光出して目の前の悪魔や他の人達の傷が消えるのだった
悪魔）なっ!?傷が…！
ダン「これでいいだろ…傷は治したがまだ動けないからゆっくり休んでくれ…俺はこの先に用がある…」
悪魔）待って！
悪魔はダンの腕を掴む
悪魔）傷を治したことは感謝するが！この先は危険だ!!すぐに逃げろ！
ダン「大丈夫だ…」
そう言って悪魔の掴む手を優しく振り払う
悪魔）っ!?
ダン「行ってくる…」
そう行ってダンは走り出していく

ーーーーーー
サーゼクス「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」
ミカエル「これほどとは…」
アザゼル「まさに化け物だな…ありゃ…」
それぞれの代表格の三人はボロボロになりながらも二頭の龍を見つめる

???「フン…小虫が…随分と粘ってくれたな?」
白い龍はそう言って鬱陶しそうにサーゼクス達を見て
???「だが所詮は雑魚の集団よ…この我々の戦いに水を差したばつをくれてやろう…この者に裁きをな!」
そう言って赤い龍はボロボロの魔法少女の衣装を着た悪魔に狙いを定め
サーゼクス「っ!?に、逃げるんだ!セラフォルー!!」
サーゼクスは大声でその少女に叫ぶが…
赤い龍「もう遅いわっ!!!」
赤い龍は力を溜めた炎をその少女に向かってブレスをしていき
???「(あっ…私…死んじゃうんだ……ごめんね…サーゼクスちゃん…ソーナちゃん…)」
少女はそう思いながら目を閉じて赤い龍のブレスを受けてしまうのだった…
サーゼクス「セラフォルー!!!!」
サーゼクスは大声でその少女の名を叫ぶ
赤い龍「フン…たわいもない…」
サーゼクス「くっ!」

サーゼクスはそのまま力が抜ける様に四つん這いになると顔を歪めて悔しそうに地面を殴る

赤い龍「んっ…？」

すると赤い龍は何かに感じたのか少女にブレスした場所をみると…

ーーーーガアアアアアッ!!!ーーーーー

大きな咆哮をあげる存在がいた…その存在は弓の様なモノを持った巨大なドラゴンがこの地に降臨するのだった

～第二話「激突するドラゴン達！二天龍ＶＳ超神光龍」～

ナレーション）巨大なドラゴンが現れる数分前…ダンは、もっとも強い気配がある場所へと向かっていたのだった

ダン「確か…この辺で……っ!?あそこか！」

ダンは強い気配を感じ取ると目の前には二頭の龍とその二頭の龍の周りでボロボロになっている人達を見つける

ダン「あの双龍が原因だったのか…」

ダンはそう呟くと次の瞬間目を見開いたそれは…

ダン「あの赤い龍！あの女の子にブレスを吐くきか!!」

ダンはそう言ってデッキから一枚のカードを出して

ダン「そうはさせない！」

そのカードを掲げて

ダン「天駆ける闇祓う光！超神光龍サジットヴルム・ノヴァ！煌臨!!」

そう叫ぶとダンの背後から光を纏った巨大なドラゴンが現れるとダンと一体化すると球体となって少女を守る様に赤い龍のブレスを受けるそして…

ーーーーガアアアアアッ!!ーーーーー

咆哮という雄叫びをあげて無傷のまま二天龍に対峙するのだった

ーーーセラフォルーｓｉｄｅーーー

私はサーゼクスちゃん達と一緒に暴れている二頭の龍を討伐しようとしていたんだけど…全然歯が立たなくって私達はボロボロになって窮地に立たされているの…うぅっ…凄く身体中が痛いよぉ…そう思い立とうするも赤い龍は私を見つけると力を溜め始めブレスを放とうとしている…嘘っ…避けきれない…怖い…ぶるぶると身体を震わせなんとか逃げようと力を入れようとしたけれど…全然力が入らない…赤い龍はエネルギーを溜め終わると私に向かってブレスを吐き始めた…向こうで私を呼んでいるサーゼクスちゃん…

セラフォルー「(ごめんね…サーゼクスちゃん…ソーナちゃん…)」
私は心の中でお友達のサーゼクスちゃんと大好きな妹のソーナちゃんを想いながら目を閉じて赤い龍のブレスを受ける覚悟を決めて…
ーーー諦めるなーーー
…えっ?
ーーーーー大丈夫だ…ここは…ーーーー
とても優しく…とても暖かい…声が…
ーーー俺に任せろ!ーーー
力強くとても頼りになる男の人の声が…私の頭の中に届いた…
ーーーーーガアアアアアッ!!!ーーーーー
セラフォルー「っ!?」
いきなり近くからドラゴンの咆哮が聴こえて目を開けるとそこには…
私を守る様にして二頭の龍に対峙する形で弓の様なモノを持った巨大な龍?がいた…
ーーーセラフォルーｓａｉｄ　ｅｎｄーーー

ーーーーー
弓の様なモノを握っている巨大なドラゴン…〝超神光龍サジットヴルム・ノヴァ〟が赤い龍と白い龍と対峙するのだった
赤い龍「貴様っ!何者だ!!」
白い龍「我々に刃向かうきか!!」
二頭の龍は威嚇する様に大声で巨大なドラゴンに問う…
サーゼクス「あの龍は一体…」
サーゼクスは二頭の龍と対峙している巨大なドラゴンを観ながらそう呟く
セラフォルー「サーゼクスちゃん!!」
サーゼクスに向かって走るセラフォルー

サーゼクス「セラフォルー!?無事だったのか!」
セラフォルー「うん!あの大きなドラゴンに助けてくれたんだ～♪」
嬉しそうにサーゼクスに話すセラフォルー
サーゼクス「あのドラゴンが…」
そう言って巨大なドラゴンを見つめて
アザゼル「おい!サーゼクス!!」
アザゼルとミカエルがボロボロにサーゼクスに近づいていく
サーゼクス「アザゼル、ミカエル…君達も無事だったんだね?」
二人が安心だと知ると胸を撫で下ろす
アザゼル「まあな…それよりあのドラゴンはなんだ?」
ミカエル「我々の味方でしょうか?」
二人は訝しめながらドラゴンを見つめてサーゼクスに問う
サーゼクス「それは…」
サーゼクスが自分の友を助けたことを話そうとするももしかしたらただの気分で二頭のドラゴンを倒した後我々を襲うのではないかとそのドラゴンに対して疑ってしまい言葉を濁す…すると…
セラフォルー「大丈夫♪」
セラフォルーはニコニコした様子でサーゼクスやアザゼルとミカエルを見る
サーゼクス「セラフォルー…?」
アザゼル「何が大丈夫なんだ?」
ミカエル「あのドラゴンは我々の味方ってことですか?」
セラフォルー「うん!だって…あのドラゴンさんは…とても優しそうな声で言ってくれたんだもん!俺に任せろって♪」
セラフォルーはそう言って三人に笑顔を向けるのだった。

ーーーーーーーーーー

その四人が話ている頃……三匹のドラゴンが向かいあっていた。
一方、ダンが煌臨したサジットヴルム・ノヴァは二匹のドラゴンを見つめてゆっくりと弓を構えるのだった。
赤い龍）この赤龍帝〝ドライグ〟と知って歯向かうか！
白い龍）同じく…白龍皇〝アルビオン〟を！
サジットヴルム）……。
二体のドラゴンに対して静かな闘志を向けて
アルビオン）フン…よかろう…雑魚共より先に…
ドライグ）貴様を潰そう!!
そう言って二体のドラゴンは、サジットヴルム・ノヴァに襲いかかるのだった。

～第三話「激突王のキセキ」～

ーーーBGM「宇宙を駆ける光龍騎神」ーーー

ドライグ）喰らうがいい!!

赤龍帝ドライグは口から先程のブレスをサジットヴルム・ノヴァに放つが、それを躱す…そして同時に弓を構えて矢を展開すると狙いを定めてドライグに矢を放つ

アルビオン）甘いわ!!

しかしアルビオンは己の能力で矢の力を〝半減〟させて弱体化した矢を尻尾で壊す

ドライグ）感謝するぞアルビオン…

アルビオン）フン、コイツを倒す前に貴様が倒されたら目覚めが悪いだけだ…

ドライグ）そうか…なら…!

ドライグはそのままサジットヴルム・ノヴァに向かって飛翔していき回転して尻尾で鋭い攻撃を放つ

サジットヴルム）ッ!!!

その攻撃を弓で受け止める

ドライグ）クククッ…ガラ空きになったなぁ?アルビオン!!

アルビオン）死ねぇぇっ!!

そう言いながら力を込めたブレスを一気に放つすると…

ーーーーｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!ｂｏｏｓｔ!!ーーー

ブレスの威力が上がってサジットヴルム・ノヴァを包み込んで爆発を起こす…その前にドライグが避けた為、攻撃が当たらずに済んだのだった。

セラフォルー「ドラゴンさん!」

サーゼクス「やはりあのドラゴンでも勝てないのか…」

アザゼル「クソ…!」

ミカエル「これまでですか…」

誰もが諦めており
アルビオン）フン！我々の戦いに挑むからそうなるのだ！
ドライグ）我々は最強のドラゴンだ…そんじゅそこらドラゴンと一緒にするな！ハハハハハ!!
慢心する二体のドラゴン…確かに此処において最強なドラゴンは今は、この二体のドラゴンだろう…だが……
煙りが晴れると……
ーーーＢＧＭ「ブレイヴ・メインテーマ」ーーー
サジットヴルム）…………
サジットヴルム・ノヴァは無傷でいた
セラフォルー「ドラゴンさん！」
サーゼクス「あの攻撃を受けて無傷!?」
アザゼル「ほほう…こりゃたまげた…!」
ミカエル「信じられない！」
セラフォルー達はサジットヴルム・ノヴァの存在を確認すると喜び、驚き、感心、をしており二体のドラゴンに対しては…
ドライグ）馬鹿なっ!?
アルビオン）我々の技を受けて無傷!?
驚いていた…そしてそんな様子を見たサジットヴルム・ノヴァは…
ーーーガァァァァァァァッ!!!ーーー
一同『ツッッ!!???』
サジットヴルム・ノヴァの咆哮に耳を抑えるセラフォルー達と一瞬の怯えを感じてしまうドライグ達
サジットヴルム）グルルル…ガァッ!!
サジットヴルム・ノヴァは地面を蹴って二体のドラゴンに迫っていく
ドライグ／アルビオン）っ!?
サジットヴルム）グルルルッ！
弓を振ってドライグとアルビオンを吹き飛ばしていく
ドライグ／アルビオン）ガァァァァァァッ!!
ーーードゴォォォォォン!!!ーーーーーー

やがて二体は岩石に激突してボロボロになる
サーゼクス「たった一撃で二体を!?」
セラフォルー「すごい！すごい！」
アザゼル「つぇな…あのドラゴン…」
ミカエル「はい、我々達では、とても敵いません…」
サジットヴルム・ノヴァの行動を見てサーゼクスは驚きセラフォルーは目を輝かせアザゼルとミカエルはその強さに冷や汗をかく
ーーーBGM「宇宙を駆ける光龍騎神」ーーー
ドライグ）グッ！こ、こんな事…ありえるかぁぁぁっ!!
ドライグは身体を起こすとサジットヴルムに襲いかかる
サジットヴルム）……
サジットヴルムが弓を投げると剣に変形してそのままドライグを受け止める
ドライグ）何っ!?
サジットヴルム）ガァァァァァッ!!
大きく剣を振ってドライグを吹き飛ばすとそのまま斬撃を飛ばす
ドライグ）グアアアアッ!!!ば、馬鹿な…
ドライグはその斬撃を受けてゆっくりと倒れた
アルビオン）ドライグ!?
サジットヴルム）グルルルッ…
アルビオン）オノレェェェ!!
アルビオンはそのままサジットヴルムに進撃していく
サジットヴルム）ッッッ!!
迎え撃つかの様に駆けると剣を構えて
アルビオン）死ねぇぇぇぇッ!!
アルビオンは切り裂く様に爪を振るうと同時にサジットヴルムも剣を振り互いがすれ違う……
アルビオン）わ、私が負ける…だと…!?
そのままアルビオンは倒れ伏したそれを見てサジットヴルムは二体のドラゴンが倒れたのを確認して…
ーーーガァァァァァッ!!!ーーー

勝利の雄叫びをあげる
サーゼクス「まさか…あの二体の龍に勝つなんて…」
アザゼル「確かにな…だが…」
ミカエル「あのドラゴンが敵か味方かはまだわからないので…」
三人はそのドラゴンに対して感謝と同時に強い警戒心を持つ
セラフォルー「ドラゴンさ～ん!!」
しかしそんな空気を壊すが如くセラフォルーがドラゴンに向かって走っていく
サーゼクス「こら!セラフォルー!危ない!」
サーゼクスは止めようとするもセラフォルーは聴こえずドラゴンの近くに来る
サジットヴルム）……
サジットヴルム・ノヴァはそんなセラフォルーを見つめて
セラフォルー「助けてくれてありがとうね♪」
セラフォルーは笑顔をサジットヴルムに向けた
ーーー気にするな…俺は、ただやりたいことやっただけだ
一同「ッ!!?」
突然聴きなれない声に一同は戸惑うも…
セラフォルー「あっ!この声!あの時の!!」
ーーーああ…君に話しかけたのは俺だ
セラフォルー「何処なの?声が聴こえるのに姿が見えないんだけど～」
ーーーははは…やっぱり、わからないか?
セラフォルー「っ!?えっ!?もしかして…」
サーゼクス「ドラゴンが喋っているのか?」
アザゼル「マジか!?声からして充分若いだろ!?」
ミカエル「そうですね…」
セラフォルー「もしよかったら…姿を見せて欲しいなぁ～」
セラフォルーは上目遣いで目の前のドラゴンに言うが…
ーーーすまない…その前に治療をさせてくれ…
一同「えっ?」

そう言うとサジットヴルムが剣から弓に変えると矢を展開して上空に放ったのだった。すると上空から淡い光がボロボロになっている者達に降り注がれていく
セラフォルー「何これ…凄く優しい…」
サーゼクス「それに傷がどんどん癒えていく」
アザゼル「こりゃぁ…たまげたぜ…サンキューなドラゴンさんよぉ～」
ミカエル「感謝の言葉でいっぱいです」
他の者達も礼などを言う
アルビオン）グッ！
ドライグ）グハっ！
一同「ッッッ!?」
ドライグとアルビオンがボロボロになっていたのにいつのまにか傷がなくなっていたのに驚き警戒をした
ーーーやめろ…これ以上戦うな…
言葉でここにいる者達に威圧で殺気などをなくす
ドライグ）……何故俺達を助けた
アルビオン）傷も癒して…貴様は何が目的だ
サーゼクス「確かに…なぜなんだい？」
二体のドラゴンの言葉に頷く様にサーゼクスはサジットヴルムに聴いた
ーーーこれ以上争えば…多くの命が消えてしまう…そこに残るのは大きな傷跡だけだ憎しみ、悲しみと言ったものだけだ…それを鎮めるために俺は此処に居る全員の傷を治したんだ…和解をして欲しいからな
サジットヴルムから発せられる言葉に此処にいるみんなは押し黙る
サーゼクス「和解…か…戦争を終結してくれと言うことかい？」
ーーーああ、これは俺のみんなからのお願いだ…出来ないか？
その言葉に全員が黙ると…
ドライグ／アルビオン）ククク…アハハハハッ!!!

サーゼクス達「ッッ!?」
突然笑いだすアルビオンとドライグに驚くサーゼクス達
ドライグ）ハハハハハッ!!我々に勝つだけではなく傷を治してしまいには勝者のお前が俺達にお願いとは!!
アルビオン）ククク…おもしろい事を言うな…
ーーーおもしろい事か？
首を傾げる様な声で聴き返す
ドライグ）当たり前だ！全く…逆に先程の戦いが馬鹿馬鹿しいな…
アルビオン）だな…よかろう…！我々はお前の言葉に賛同してやる
サーゼクス達「ッッ!?」
ーーーそうか…ありがとう…
ドライグ）礼を言うな…全く…
ーーーそうか…アンタ達はどうするんだ？
するとサーゼクス達に声を掛けて
サーゼクス「我々かい？我々は…」
アザゼル「もちろん戦争はやめるぞー」
ミカエル／サーゼクス「「えっ？」」
意外と言う感じでアザゼルを見る二人
アザゼル「おい、なんだその気の抜けた声は…」
ジト目で二人を見るアザゼル
サーゼクス「い、いや…コホン…我々達も戦争はやめるとするよ」
ーーーそうか…んっ？
安心すると突然サジットヴルムの身体が光始めた
セラフォルー「っ!?身体が光ってる!?」
ーーーああ…お別れみたいだな…
セラフォルー「ッ!?そんなぁ…」
セラフォルーは涙目になる
サーゼクス「まさかさっきの力で…」
ーーーいや、別の場所に移転するだけだ…
セラフォルー「移転…？」
ーーーああ…だからそんな悲しそうな顔をするな…可愛い顔が台

無しだぞ？
セラフォルー「ふぇっ!?」
その声の主の言葉に顔が真っ赤になるセラフォルー
アザゼル「おうおうおう…ドラゴン様が少女を口説くとはなぁ～
「勘違いしているみたいだが、これでも一応人間だぞ？」…はっ？」
一同「えええええっ!?」
まさかの真実に驚く一同
ーーーそんなに驚く事か？
ドライグ）驚くわ！
アルビオン）その姿で人間と言われてピンとこんわ!!
アザゼル「むしろ何故ドラゴンの姿なんだよ!?」
ーーーそう言われても……
突っ込まれて困惑するサジット…そしてそんな茶番紛いな事でだんだんと姿が消え始める…
セラフォルー「待って！まだ姿と名前を教えてもらってないよぉ！」
ーーー…すまない…それは出来ない…
声の主はセラフォルーのお願いを断る
セラフォルー「そんなぁ……」
そのままセラフォルーは涙を流して…
ーーーそのかわり…
するとサジットから光が固まりそのままセラフォルーにいく
セラフォルー「これは……？」
その球体を受け取ると光の球体は消え一枚のカードが現れた
ーーーそのカードを持っていてくれ…そうすれば…いつか会えるさ…
セラフォルー「うん…！」
涙を流しながら大事そうにカードを抱きしめて
ーーーまたな…みんな…
そう言ってサジットヴルムはその場から消えたのだった。
ーーーセラフォルー　ｓｉｄｅーーー

セラフォルー「行っちゃった…」
私はそう呟きながらカードを大事に持つ
サーゼクス「不思議なドラゴンだったね…いや、人間だったね？」
そう言って苦笑いするサーゼクスちゃん

アザゼル「確かにな…」
ミカエル「でも、心優しき存在でしたね…」
色々ありすぎて疲れ切ったアザゼルちゃんと褒める様に微笑むミカエルちゃん
アザゼル「それに…」
アザゼルちゃんは私の方を向いて…なんだろう？
アザゼル「まさか嬢ちゃんを口説くとはな！」
セラフォルー「っ／／／／!?」
そ、そうだよ／／／急に可愛いって言われて私びっくりしちゃったよ／／／！あうぅ～／／／／不意打ちだよ～～／／／／でもでも！嫌じゃなかったし／／／それに…／／／
セラフォルー「かっこよかった…／／／／（ボソっ）」
アザゼル「ハハハハハッ！脈ありだなこりゃぁ～」
サーゼクス「あはは…そういえばあのドラゴン？に何をもらったんだい？」
そう言ってサーゼクスちゃん達は私が持っているカードを見る…
そこには…
セラフォルー「激突王のキセキ？」
激突王？さっきのドラゴンかな？
サーゼクス「ふむ…激突王か…納得出来る言葉だね…」
アザゼル「確かに…妙にしっくりくるな…」
ミカエル「わかります…では、あのドラゴンの名は仮で激突王としますか？」
サーゼクス「そうだね…」
アザゼル「意義ないな」
激突王…かぁ…うん、また貴方に会いたいです…私の大好きな激突

王様…／／／私はそう思ってカードを強く抱きしめる。この瞬間…私は初めて恋をするのだった…

ーーーセラフォルー　ｓｉｄｅ　ｏｕｔーーー

この戦争はあるドラゴンによって終結して暴れた二頭のドラゴンはケジメという形で自ら封印の道を選び戦争に参加していた神達は消息を断つのだった。そしてその戦争を終結させたドラゴンを英雄として歴史に刻まれた…そのドラゴンの名は…激突王と…

～第四話「次の場所、新たな出会い」

ダン「んっ…戻れたか…」

先程ドラゴンの姿をしていたダンだったが別の場所に移転する事で元の姿に戻る事が出来たのだった。

ダン「ここは…森の中か…？なんだか強い気配を多数感じるな…特にあのときの少女と同じ気配がするな…？」

ダンは、そう言ってセラフォルーという女の子と同じ気配を感じると辺りを見渡し始めた

ダン「…とりあえず移動して…っ!?」

ダンが動こうとすると何かを感じ取り…

ダン「血の匂い…怪我をしているようだな…それに逃げるようにして動いている…」

ダンはそう言うと目を閉じて意識を集中するとダンの身体が光ってアーマーが纏われるのだった。（※アーマーはブレイヴのときのバトルフォーム）

ダン「とりあえず…放っておけないな…」

そう言って目を開けて反応がある方へと向かって行くのだった。

ーーー???　ｓｉｄｅーーー

???「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

私は、複数の追ってから逃げる様に深い森を走っているにゃ…何度か追ってを乖離打ちにするも油断して怪我を負ってしまったから思うように走れないでいるにゃ…ううっ…不覚にゃ…

???「あっ!?」（草履の鼻緒が切れてバランスを崩してそのまま前に倒れてしまう

???「ううっ…痛いにゃ…」

そのせいで足首を捻ってしまう…ホントに最悪にゃ…

悪魔）見つけたぞ！

???「っ!?」

もう追ってが来たのかにゃ!?

悪魔２）随分と手こずらせてくれたなぁ？黒歌よ？
黒歌「くっ!?」
悪魔３）観念して俺たちに殺されるんだな…はぐれ悪魔さんよぉ～
ーーーはぐれ悪魔……
転生によって下僕悪魔となったが、強力な力に溺れて主人を殺してお尋ね者となった悪魔のことを言う他にも反旗を翻してはぐれ悪魔となる事もある…。
黒歌「随分しぶとく追ってくるわね…しつこい男は嫌われるにゃん」
そう言って私は、追って達を睨んで出来るだけここで乖離打ちにしようと考える…
悪魔４）フン、強がるなよ？今のお前は脅威でもなんでもないんだよ…
黒歌「…どう言うことにゃ？」
悪魔５）簡単な事だお前は怪我を負っている…それもただの怪我じゃなくな…（ニヤリ
黒歌「っ!?」（突然身体から変化が起きるか、身体が痺れる!?もしかして…
黒歌「痺れ薬…！」
悪魔１）それだけじゃない…弱体化の薬を混ぜてあるから…今のお前は無力だ（そう言って剣を抜き近く
黒歌「クッ!?」
最悪にゃ…こんな事になるなんて…私は悔しそうに顔を歪めて
悪魔２）なぁなぁ…ホントに殺しちまうのか？
悪魔３）勿体無いなぁ…折角のエロエロボディをしている女なのに…犯しちまおうぜ？
ーーゾクッ！ーー
い、今なんて…
悪魔４）賛成だなぁ～むしろ犯した後、殺してもいいんじゃね？
悪魔５）むしろ嘘の報告をして俺たちの性奴隷にするのもありだなぁｗｗｗ

悪魔２）おっ！いい案だなぁ～
悪魔１）仕事に私情を挟むんじゃねぇ…上にバレたら俺たちも殺されるぞ？
悪魔２、３、４、５、「「「バレなきゃいいじゃん」」」
悪魔１）たくっ…勝手にしろ…と言う事だ残念だが、お前は殺されないがコイツ等の性奴隷になるんだな…良かったな？死ななくて…まぁ、主人を殺した報いを受けるんだ…せいぜい身体でコイツ等を満足させてみるんだな
ふざけるな！ふざけるな！私は！こんな奴らの好き勝手にされてたまるか!!
悪魔２）んじゃ～頂くか～
そう言って一人の悪魔が私に触れようとする
黒歌「っ!?汚い手で触るにゃ!!」（ぼりっ！
威嚇を込めて男の頬に引っ掻く
悪魔２）っ!?イテェなぁ…なにすんだこのアマ!!（バキッ!!
黒歌「あぐっ!?」
引っ掻いた男に頬を殴られて私の頬は赤く腫れる
悪魔２）もう許さねぇ…ブチ犯してやらぁ!!オラッ!!
ーーービリビリビリビリッ！ーーー
黒歌「いやぁぁぁっ!!」
私の着物をその悪魔が破いて私の肌が露出してしまい乳房が晒されてしまい
悪魔３）おお～いい身体に爆乳でエロエロ満天だな
黒歌「いやっ！離して!!」
私は暴れる様に動くが両手首を別の悪魔に掴まれてどうにも出来ないでいるにゃ…
悪魔２）うるせぇし暴れるんじゃねぇ！おい！しっかりと押さえてろ！
悪魔３）はいはい、次は俺だからなぁ～
悪魔２）わかったわかった
いやっ！いやっ！こんな奴らに！誰か！誰か！助けて…！

悪魔２）ハハハハハッ！見ろよコイツ泣きながら誰かに助けを求めている顔をしてるぜ？笑えるなぁ！主人を殺しておいて助けを求めているなんてよ～誰も助けるわけねぇよバーカお前ははぐれ悪魔なんだからよ!!

あぁっ…そうにゃ…どんな理由でも、私は殺しちゃたんだよね…誰も助けに来てくれるわけないもんね…因果応報だもんね…ごめんね…白音…最後まで駄目なお姉ちゃんで…そう思って足掻く力が抜けて私は諦める様に涙を流して瞳から光がなくなり目を閉じて…

ーーバキッ!!

悪魔２）ゴホッ!?

悪魔３）なっ!?

ーーードゴッ!!

悪魔３）グハっ！

突然私の身体から嫌な重りがなくなると優しくて暖かい感覚が私の身体に触れてきて

???「大丈夫か？」

黒歌「…ふぇっ？」

突然優しい男の声がしたので私は目を開けて光が戻るとそこには真っ赤な髪に金色のアーマーを纏った男の子が私をお姫様抱っこして優しく微笑んでくれたのだった。

～第五話「初めての戦闘」～

ナレーション）時間は遡り…ダンが黒歌と出会う前……
ダン「この血は…やはり負傷しながら追われているんだな…しかも…まだ新しい…俺がここに転移されて数分ってところか…」
そう言いながら地面に付着している血を観察しながらその場所へと歩いていく
ダン「…嫌な感じだな」
そう思いながら森の奥深く移動して
ーーーきゃぁぁぁぁぁっ!!
すると突然女の悲鳴が聞こえてきたのだった。
ダン「っ!?今の悲鳴は…!急がないと!」
そう言って、ダンは悲鳴が聞こえる場所へと走っていき
ーーー誰か!誰か!誰か!助けて…!
心の声を聴いたダンは急いで向かうと複数の男達が一人の女性を襲っているのを見つける。
ダン「っ!?」
それを見たダンは走っていき…
ーーーバキッ!!
悪魔２）グホッ!?
悪魔３）なっ!?
ーーードゴッ!!
悪魔３）グハッ!?
ダンは女性に襲っていた悪魔二人を殴って蹴り飛ばすと女性を優しくお姫様抱っこしてその場から距離を取り、女性の顔を伺うと女性は震えながら涙を流していた。
ダン「大丈夫か？」
優しくお姫様抱っこしている女性に安否を確認する。
???「…ふぇっ？」
女性は、聴きなれない声がしたので目を開けてダンの顔を見るのだった。

ーーーそして今に至る
ダン「大丈夫か？」
ダンはもう一度女性に安否を確認する。
???「ぁっ…は、はい…大丈夫…にゃ…」
ダンの言葉に頷くがやはり女性として先程された事が恐怖して震えていた。
ダン「……。」
そのまま後ろの大樹に女性を預けて一旦アーマーを解除すると上着を女性の身体を隠す様に羽織らせる。
???「あっ…」（羽織られては女性は無意識にダンの上着をぎゅっと掴む
ダン「此処で待っていてくれ…すぐに終わらせる…」
そう言って悪魔達の方に対峙するように身体を向けて
悪魔２）テメェ…よくもやってくれたな？
悪魔３）俺たちを敵に回したってことは死ぬ準備が出来ているって事だよなぁ？
悪魔４）しかも人間が冥界に入って来て俺たちの楽しみを奪いやがって…後悔させてやらぁ…
そう言って悪魔達は武器を持つ
悪魔１）運が悪かったな？人間…
悪魔５）大人しくくたばれ…まあ、その女を渡してくれたら助けてやらん事は無いが？ヒャハハッ!!
黒歌「っ!?」
その言葉を聴いて黒歌はビクンと身体を震わせて自分のせいで関係ない人が死ぬ事ともしかしたら自分を差し出されるんじゃないかと恐怖する…
ダン「……言いたいことはそれだけか？」
悪魔達「っ!?」
ダンがその悪魔達に向けて殺気と威圧を込めた言葉を言うとダンの身体に再びアーマーが現れる。
悪魔２）舐めるなっ！人間の分際で!!

そう言ってダンに殴られた悪魔が剣を待って斬りかかっていく
黒歌「っ!?逃げて!!」
そう言って黒歌はダンに叫ぶがダンは自分の腰にあるデッキケースからカードを一枚抜いてそのまま掲げた
ダン「フラッシュタイミング!マジック、〝サイレントロック〟を使用!」
そう叫ぶとジャラジャラ!っとどこからか無数の鎖が現れて剣を振るったの悪魔の攻撃を防ぐと同時に身体を拘束したのだった。
悪魔２）なに!?
ダン「続けてマジック!ヴィクトリーファイア!」
二枚目を抜きそう叫ぶとVと描かれた炎と稲妻を纏った文字が現れて…
ダン「犯した罪をその身で償え!!」
ダンはそう言って拘束された悪魔に向けてVと描かれた文字が迫っていく
悪魔２）まっ!?ギャアアアアアッ!!!
当然拘束された悪魔は容赦なく受けてその攻撃で灰と化した
悪魔１）なっ!?
悪魔３／４）貴様!よくも!!
悪魔１）待て!早まるな!!
それを見た悪魔の一人は驚き、悪魔二体はダンに襲いかかりそれを見ていた悪魔の一人は止めようとするも…
ダン「悪いが…終わりだ…フラッシュタイミング!サジッタフレイムを使用!!」
そう叫ぶと上空が黒雲が出来そこから無数の火の矢が降り、二体の悪魔を攻撃していく
悪魔３／４）ギャアアアアアアッ!!!
当然まともに食らって二体の悪魔を倒す
悪魔５）己っ!よくも!!
そのまま槍を持って刺しに行く悪魔…

ダン「フラッシュタイミング…〝ブルースプラッシュ〟を使用!!」
すると襲いかかって来た悪魔は突然消滅するように消えた。
ダン「残るのは…アンタだけだ……」
そう言ってその悪魔を見る。
悪魔1）…まさか、人間がここまでやるとは…
ダン「……」
ダンは、黙ってその悪魔の言葉を聴いて
ダン「どうする？続けるのか？」
悪魔1）当たり前だ…私は、その悪魔を殺すのが目的だからな…
ダン「何故そこまで…この人を狙う？」
悪魔1）……なにも知らずに…その女を助けたのか？
黒歌「……」
女性はダンの方を見つめ、ダンの言葉を待っていた…。
ダン「助けてと言う声が聴こえたからだ…」
ダンはそう呟く
悪魔1）……ただそれだけの為に？
ダン「そうだ…それで？お前はどうするんだ？」
そう言うとダンは目を細め悪魔を見つめるのだった。
悪魔1）……はぁ
悪魔は一息吐くと剣を鞘に仕舞う
悪魔1）今の俺じゃ…お前に勝てない…それに……その女はもう殺す対処じゃなくなった…
そう言って悪魔はダンと黒歌から視線を外すように後ろを向いて歩き出した。
ダン「…どう言う事だ？」
訝しげにその男を見るダン…
悪魔1）詳しく知りたいならその女から事情を聴くことだな…
そう言って悪魔は去っていくのだった。

～第六話「黒歌の真実」～

ダン「大丈夫か？」
あの悪魔が去った後…ダンは黒歌に近づいて安否を確認する。
黒歌「う、うんっ…大丈夫にゃ」
そう言って黒歌はダンの言葉に頷くのだった。
ダン「そっか…その…大丈夫なのか？」
ダンは少し目線を外して聴いて
黒歌「？何がにゃ？」
黒歌は首を傾げて…
ダン「その……服が…その……」
ダンは、言葉を濁して頬をかいて
黒歌「にゃ？…あっ…／／／」
黒歌は、何言っているか分からないでいたが…自分の姿を見て突然顔を真っ赤にしてギュッとダンの上着を握って自分の肌を隠す。
黒歌「…見たかにゃ？」
ダン「……見てない」（目を逸らして
黒歌「……／／／」
ダン「……」
気まずい雰囲気が漂わせており二人はしばらく無言だった。

しばらくして……
黒歌「その…ありがとうにゃ…」（上着をダンに渡して
ダン「っ!?着物が直ってる？」
ダンは先程までビリビリに破けた黒歌の着物が直っている事に疑視して
黒歌「うにゃ？どうかしたかにゃ？」
ダンが驚いているのを見て黒歌は首を傾げて見つめる。
ダン「い、いや…さっきまで破れていた着物が元通りになっているから…」

黒歌「にゃはは♪私にかかればこれくらいチョチョイのチョイにゃ♪」
そう言って黒歌は胸を張る。
ダン「へぇ～凄いなぁ～」
黒歌「えへへ♪ありがとうにゃ♪」
ダンはそう呟くと黒歌は、上機嫌に笑顔をダンに向けるのだった。
ダン「そういえば…自己紹介がまだだったな…？」
黒歌「にゃ！そうだったにゃ！じゃあ、私から自己紹介するにゃ♪私は黒歌っていうにゃ♪君の名前は？」
ダン「俺は馬神弾だ…ダンって呼んでくれて構わない…。」
黒歌「わかったにゃ♪よろしくにゃダン♪」
ダン「こちらこそよろしくな？黒歌？」
ダンと黒歌は互いに自己紹介をし終えるとダンは真剣な表情になる。
ダン「すまない黒歌…追われている理由を聴いてもいいか？」
ダンはそう言って黒歌を見つめる。
黒歌「…そう…だね…ダンになら…話しても大丈夫にゃ…」
そう言って黒歌は意を決して口を開いた
黒歌「私は…主人を殺して逃げてきたの…」
黒歌はダンに悲しそうな表情でそう告げるのだった。そこから黒歌は自分の事を話し始めた…元は猫又と言う妖怪で両親は既に死んでいる為、身内が妹だけということ…そして生きる為に悪魔の男と契約して転生悪魔となっるが、その男に妹を無理矢理転生悪魔にしようとした事で妹を守る為にその男を殺したと告げる。
ダン「……。」
ダンは黙って黒歌の話を聞く
黒歌「でも、このままじゃ白音にも被害がいくと思って私は…白音を信頼する悪魔の屋敷に預けたにゃ…」
ダン「……そうだったのか」
その後も黒歌は、はぐれ悪魔になった自分のことで白音の事が心配になってその様子を見に行ったことをダンに話す…黒歌の思ってい

た通り妹は姉のやった行いで他の悪魔から責められ殺されそうになっていたが幸いその屋敷の人達がその悪魔達を鎮めてくれたおかげだと黒歌は安心した表情でダンに話す…。
黒歌「でも…結局私は馬鹿だった…私がはぐれ悪魔になったせいで白音に迷惑をかけてしまったにゃ…」
黒歌は涙を流して不甲斐ない自分を責め続ける。
ダン「……。」(ギュッ)
それを見たダンは近づいて黒歌を優しく抱きしめるのだった。
黒歌「ふぇ…?」
黒歌は、抱きしめたダンを見つめて
ダン「黒歌…俺は、よくお前の事は知らない…でも、自分を責めるのは間違っている…」
黒歌「でも私…!」
ダン「確かに黒歌は主人を殺してはぐれ悪魔になって妹に危険な事をさせてしまったのかもしれない…だが、それと同時にお前は妹を守る為に戦ったんだ…それに対して俺は凄いと思うぞ?」
ダンはそう言って黒歌を見つめた
黒歌「ダン…ありがとうにゃ…」
そう言ってダンに微笑みかけて
ダン「黒歌…この後どうするんだ?」
黒歌から離れては今後のことを聴くことにするダン。
黒歌「そうね…このまま私は消えるにゃ…ダンに迷惑をかけたくないにゃ…」
ダン「俺は迷惑だなんて思っていないぞ?それにお前を放っておけない…」
黒歌「っ!?だ、だめ…私に優しくしないでにゃ…」
そう言って黒歌はダンから離れようとして
ダン「黒歌…?」
黒歌「私ははぐれ悪魔…それに関係ないダンを巻き込んでしまったら私は…それにダンはこんな私の手を握ってくれるのかにゃ!?」
悲痛という叫びをあげる黒歌にダンは…

ダン「……。」（ギュッ）
迷う事なく黒歌の両手を握って
黒歌「あっ……」
ダン「大丈夫だ……お前一人に背負わせたりしない…俺も一緒に背負ってやる…お前を一人にしない！」
真っ直ぐな目で黒歌を見つめながらダンはそう言ったのだった。
黒歌「なんで…なんで！私なんかの為に！」
ダン「放っておけないからだ…助けてと言われたからには最後までお前を守ってやりたい…そんな理由じゃだめか？」
黒歌「っ!?ひ、卑怯にゃ…そんな事を言われたら私…」
そう言ってダンに抱きついて涙を流す。
ダン「……もう大丈夫だ…悲しかったんだろ？辛かったんだろう？」
黒歌「うんっ！うんっ！」
ダンの言葉に黒歌は溜まっていた感情を抑えきれなくなって
ダン「今は泣いていい…俺が側にいるから…」
ダンはそう優しく声を掛けて抱きしめながら優しく頭を撫でる。
黒歌「ぐすっ…！うわぁぁぁっ!!!」
黒歌は溜まっていた感情を爆発してダンの胸に顔を埋めながら泣き叫んだのだった。